

俳雑

第2回

【落語家の俳句】

八木 忠栄

前回につづいて俳句と落語。落語「文七元結」で「闇の夜は吉原ばかり月夜かな」、「芝浜」で芭蕉の「曙や白魚白きこと一寸」と、それぞれ俳句が引用される。他の落語でも、俳句や川柳が引用されることがある。「眼を閉て聞き定めけり露の音」は、名人・三遊亭円朝（明治33年歿）の辞世の句とされる。円朝には「鶴一羽立つあと寒き枯野哉」という寂しげな句も。

三代目蝶花楼馬楽は《俳諧亭句楽》とも呼ばれ、たくさん俳句を遺した。たとえば、

道楽を人のほむるや春の風

往時の芸人らしいのんびりとした時間が流れ、春風がまといついているように感じられる。馬楽は吉井勇や久保田万太郎らに愛された。「長屋の花見」という落語で使われる、次の馬楽の句は傑作ではないか――

長屋中歯を食ひしばる花見かな

二〇一五年に亡くなった入船亭扇橋は、俳句の本格派でもあった。かつて秋桜子編の季語集に「山吹に少女の雨具透きとほる」など二句が採られている。その芸は晩年、枯れてなお艶があった。